

アリストテレスに於ける實踐の構造 (承前)

— 靈魂諸部分の聯關 —

六

上述の如き感覺、表象、理知の間の關係はまたそれだけの能力の對象の間にも成立する。表象は隨伴する諸形相を捨象する點で感覺と區別され、その對象は一層抽象的な形相であるから、表象像は理知の對象たる概念に接近する。感覺像、表象像、概念の關係は個別特殊普通の關係であると言へよう。そして個別特殊普通の關係が連續的であるとすれば、この區別は畢竟相對性を脱しない。併し我々は先にアリストテレスの個物は質料と形相の相互限定であり、この兩原理は或は普通となり、或は特殊となる轉換的關係を以て相交渉するのであつて、一面的連續的差別は唯この交互關係を形相の側面からのみ觀た相であると考へた。(一四)

アリストテレスに於ける實踐の構造 (承前)

安藤孝行

うか、我々は之をば感覺がその無限に多様な附帶的諸形相を棄却してゆく過程であると共に、逆に概念がその普遍性を漸次限定して來る過程であると考へる。概念のこの限定は勿論質料的限定であるが、之を形相の面から見れば、それは附帶的諸形相が當該形相と組合されて來る過程に他ならない。

感覺、表象、理知又はその内容たる感覺像、表象像、概念の相互關係は假令上述の如く簡明な結論として其儘の形では認め難いにしても、尙アリストテレスの陳述の至る所に之を裏書する如き證據を指摘しうる。

例へば思考作用は感覺作用や表象作用のある動物に限つて發生し、しかも思考するに際しては必ず何等かの表象が伴ふことを要すると言はれる。(一五)

之は思考作用が發生的に見て表象や感覺作用の發展であり、同じ目的に向ふ

ところのより精緻な道具であることを示すと共に、概念と言ふものが表象と同類的であつて、唯之を一層普遍化し形式化したものであることを示す。更にその様な形式化が行はれ乍らも人間の具體的思惟が尙表象を伴ふことを必要とするといふ事は、正に思考活動が一面に於て表象の無關心的、理論的に純化されたものでありつゝ、現實的には常に表象を媒介として具體的現實在の世界に還歸せんとする實踐化の傾向を含むことを現す。而も表象はこの様に理性から行爲に向ふ下降的方向に於ける中間者たると共に、行動の直接的結果たる感覚が概念に還歸する向上的方向の中間者となる。即ち感覚は現在の存在から受ける印象であるが、時が經過し現實的對象が消滅した後も尙心中に殘存し、之が經驗を形成し、ひいては技術や知識を生む原理となるのである。この中間的媒介的位置の故にそれは時として單に感覺の殘存印象であるとか無力になつた感覺であると言はれると共に、また單に概念的思惟に隨伴するに止まらずして、それ自ら一種の思惟であるときへ言はれるのである。或はまた表象そのものがその生成に於て感覺と理性とを別々に豫想すること、それに伴つて表象の中に勘考的又は理性的表象と

感覺的表象が區別される。理性を豫想する勘考的表象が人間に限つて認められることは言ふ迄もない。しかも之等の表象は何れも快苦の感情を伴つて行動の原動力たる欲求を惹起するのである。要するに表象は感覺から出發して理性の純粹思惟に向ふ過程であると共に、既成の理性活動が行動を指導するに際しての媒介者であることを物語るものに他ならない。

普遍、特殊、個別の關係は概念表象感覺の間に成立するのみならず、又諸概念相互の間にも認められる。寧ろこの對概念は本來概念間の秩序に他ならなかつた。それではその關係はこの二種の領域に於て如何に相異するのであらうか。類概念の種概念への限定に於ては、種差はその類概念に對して決定的であり、その關係は自體的である。しかるに概念の表象への限定に於ては、上述の如く限定項は附帶的形相であつて、嚴密な意味での種差ではない。類概念を種概念に限定する爲には順を追つて一定の種差を附加せねばならないが、概念を表象に限定するに際しては附加さるべき形相は偶然的である。種概念は個別的な例を包攝するが、類概念を代表することはない。然るに表象の代表作用が個別に關るのみならず、普

遍としての類にも關るといふ事は、それが概念と異なる最も重要な特徴である。例へば肖像畫がモデルを現すのは個別を代表するのであるが、一定の邊と一定の角をもつた三角形の表象が三角形の概念を代表するのは普通者(二二五)を代表するものである。表象の媒介作用の二重性と概念のその一方性ととの相異は、概念・表象・感覺の關係が具體的であるのに對して、概念、相互間の普通特殊關係が抽象的であることを證據立てるものである。

感覺と表象は機能としては一應別であるが、之を司る靈魂部分は時には同一視される(二二六)。表象といふものは記憶や夢想や想像等に共通する基體的な作用であつて(二二七)、區別するものはその時間的様態である(二二八)。所謂共通感覺を營む部分に屬する(二二九)。共通感覺は他の諸感覺に對して一種獨特な位置を占める。即ち特殊感覺は夫々眼とか耳とか鼻と言ふ様な特殊の感官を媒介とするのに、共通感覺はこの様な特殊器官を持つことなく(二二九)。寧ろ凡ゆる特殊感覺に共通な中樞的器官たる心臓の作用である(二三〇)。それはまた第一感覺能力とか感覺の根源と言はれ(二三一)、特殊感覺の活動そのものを自覺し、之等を比較別したり(二三四)、又は之等を綜合し、更には特殊要素的的感覺を超えた或る一般的形式(二三五)

アリストテレスに於ける實踐の構造(承前)

像を表象する。例へば運動、靜止、形態、大さ(延長)數又は一と言ふ如き形像は共通感覺によつて把握又は構想される。之等空間の諸様態や數學的對象と共に時間的表象も亦その機能に屬する(二三六)。

特殊感覺は現在の對象と感官との間に生ずる瞬間的現象(二三七)であると共に、分化した特殊感官に應じてそれぞれ獨立無關係に經驗される要素的印象である。それは對象の消滅或は對象と感官との交渉の途絶によつて忽ち消滅する瞬間的印象にすぎない。然し我々の具體的知覺は單に現實的要素的印象の無秩序な繼起や集合ではなくして、何等かの形で綜合統一である。例へばこの赤いもの(林檎)は同時に硬きものであり、又甘きものである。

而もそれは如何なる特殊感覺にも屬すことなき球形をなして居り、靜止して居る一個の小さき實體である。赤きものが硬く甘いと言ふことはもとより、それが圓く小さくあると言ふ如きことも單なる特殊感覺の教へえざるところであると共に、また單なる概念的思惟の致へるところでもない。それは特殊感覺と普遍的概念的思惟の中間に位する一種の一般性を持つた直觀的認識能力即ち共通感覺の機能である(二三八)。更にまた對象の綜合的知覺は單なる瞬間的印象のみでは足りない。Aと云ふ印象とBと云ふ

印象を綜合する爲にはAがBの生起迄保存されねばならぬ。繼時的に經驗される同質的又は異質的印象群を以て統一的知覺を構成する爲には記憶が必要である。共通感覺は空開表象と共に時間表象を持たねばならない。特殊感覺と共通感覺は同一一次的對立項ではなくして、一つの知覺の兩契機である。特殊感官より傳達された刺激を感受して之を綜合する中樞的器官たる心臓の、この綜合作用の心理的概念が共通感覺である。^(一三九)そして表象とは斯くの如き統一をもつた經驗が外界に對して一種の獨立性を獲得して概念と感覺の中間に位する特殊の形像を形成せるものに他ならない。

共通感覺と表象力の右の如き機能は直ちにカントの構想力と純粹直觀とを聯想せしめる。アリストテレースの共通感覺は前述の如く時間的空間的表象能力であつて、カントの純粹直觀又は直觀形式たる時間と空間の直觀に類する。併し共通感覺像は直觀形式の時間空間に比して一層具體的であり、寧ろ先驗的構想力の圖式に近い。カントにあつては感覺の要素と純粹直觀とが飽く迄二元的に對立せしめられ、前者は素材であり後者は形式である。素材と形式の二元的概念はもとよりカントが中世のスコラ哲學を媒介として繼承せるアリストテレースの質

料と形相の對概念の遺産に過ぎない。それにも拘らず却てアリストテレースに於ては兩者の關係が一層具體的に緊密な結合を成してゐる。特殊感覺と共通感覺は異質的異種の機能ではなくして同一の知覺の要素面と構成面にすぎない。而もその間には決して前者が經驗的後天的であり、後者が先驗的的天的であると言ふ區別は存しない。

併しこの相即の關係は共通感覺と表象力とを比較すると一層明瞭になる。表象力と共通感覺とは同一の靈魂部分である。それでは何によつて二つの別の名を持つつかと云ふに、表象と言ふものは何等かの意味で現實的現在の知覺を離れて獨立に存続する形像である。それは夢にもなり記憶にもなる。しかし感覺は現實の實在的對象を離れては存続することが出来ない。具體的な知覺は特殊感覺を超えて綜合的な共通感覺機能を豫想するにも拘らず、それが知覺である限り飽く迄現在存在の制約を脱せない。それは對象と主體との直接的現實的交渉の隨伴現象である。然るに表象にあつては靈魂は對象から一層大きな距離を隔ててゐる。それによつて表象は主體の一層自由な行動計畫の原理となるのである。カントは構想力に產出的構想力と再生的構想力とを區別してゐるが、アリス

トテレスの共通感覚は或る意味で——勿論その類比は不完全であるが——前者に類し表象力は後者に近い。^(一四)即ち共通感覚は知覚を可能ならしめる條件であり表象は現實的知覚を豫想する。この區別の存する限り兩者の關係は特殊感覚と共通感覚との關係よりも遠い様であるが、而も兩者はカントの兩構想力の如く端的に對立する異質的能力ではなく飽く迄同一能力の兩面に過ぎないのである。

上述の如く表象は共通感覚の機能であるから、或る意味で感覚と同種であり乍ら、或る意味では之と區別される。表象は凡ての動物に一樣に認められるものではなく、比較的高等な動物に限る様にも説かれる。^(一四三)併し時には例へば昆虫の體を分割する場合に、感覚と運動と表象と欲求は、その各部分に共通に認められると言ふ様に下等動物にも表象力を認める。^(一四四)表象や欲求が切斷された昆虫の身體部分に残存すると言ふのは些か行き過ぎた臆説と言ふ外はないが、表象力をこの様に動物の一部に限らんとする考と、之を一般に認めようとする思想とは畢竟表象力と言ふものに程度的な相違を區別することによつて調和させられるのであらう。例へば或る箇所には、

單に觸覺しか持たぬ様な最も下等な動物に於てさへ、或る意味で象表を認めるが、但しそれは「不定の仕方」に於て持つと言つゝある。^(一四五)前述の如く共通感覚は或る意味で凡ゆる具體的知覺の成立する爲の必須條件であらうとすれば、それは何等かの程度に於て動物の全般に通ずる靈魂機能に違ひない。^(一四六)しかるに表象がその共通感覚と同じ器官に屬する同種の機能であり、感覚の殘像の如きものである以上、之亦凡ゆる動物に汎通的とみるのは極めて自然な考方である。勿論表象と言つてもその中で種々の差異を立てることが出来るから、このことは必ずしも凡ゆる表象が動物の全般に共通であることを意味しない。例へば記憶は表象の一形態ではあるが、それは唯時間表象を持つ動物に限られる。^(一四七)それは必ずしも人間のみとは限らないが少くも相當に高等な動物でなければならぬ。數の表象の如きも亦同様であらう。

この様に下等動物に不定な表象を認める理由は、そこに述べてあるところによれば、之等の動物も快苦を感じ、隨て欲望を持つからであるといふのである。この事からして我々は欲望又は一般に欲求と感覚及び表象との關係を教へられる。感覚と欲求は不離の關係を持ち、一方が

存在すれば他方は必ず存在する。^(一四八) 感覺しないものが欲求することもなければ、欲求しないものが感覺するといふ事もない。その限りに於てこの兩部分は感覺部分が營養部分に對するとは事情を異にし、寧ろ營養と生殖の兩機能の關係に類する。^(一四九) それは上下の關係ではなくして並列の關係にある。隨て感覺の部分と欲求の部分とは概念的又は心理的には別の機能を持つにしても、それによつて生物の種類を分つ原理とはなりえないのである。その概念的心理的な區別とは勿論感覺が形相の受容能力である^(一五〇) のに對して、欲求は形相の實現能力であると言ふ受動性と能動性の相違である。それ故兩者の隨伴が必然であると言つても、その制約關係は無差別的に轉換をゆるすものではない。感覺は或る意味で欲求を豫想するが、それは目的論的な豫想である。詳しく言へば、動物が感覺をもつのは欲求せんが爲である。しかるに又欲求は或る意味で感覺を豫想するが、それは動力因としてである。^(一五二) 即ち動物は感覺することによつてのみ欲求しうるのである。かくて感覺は欲求を喚起し、欲求を通して行動せんが爲に動物に與へられた形相把握の能力である。感覺は受動的認識能力であり、欲求は能動的行動能力であるが、

前者が後者を喚起するのは快苦の感情を通してである。前述の如く單なる形相把握の能力たる限りに於ける感覺は未だ行動の能力たるに足りず、理論的認識の原理とも考へられるものであるが、それが快苦の感情を伴つて體驗される限り欲求を生む動力因となる。快きものは必然的に之に對する欲求を生み、苦しきものは必然的に回避される。感覺は感情を媒介として欲求を生むのである。^(一五三) 蓋し兩者は原始的には唯一不二であるものの分化發展に他ならぬからである。そして感情を伴はぬ感覺と言ふものこそ感覺の本性の自己否定の結果に他ならない。斯の如きは高度に發達せる心性の特殊現象であつて、唯人間に限つて認められるものにすぎない。

ところで感情は直接感覺と共に感ぜられることもあれば、未來の感覺として想像されたもの、即ち表象に伴ふこともある様である。^(一五四) 併し惟ふに快苦の感情が感覺と直接してゐる場合に果して欲求が生じうるであらうか。それはむしろ衝動的又は反射的な追求と回避を生ずるのであつて意識現象としての欲求や回避は生まないのではないからうか。下等な生物は餌食を感覺して快を覺えるや否

や之に向つて觸手を伸すのであつて特に欲求を意識しないであらう。意識的な欲求、回避は感覺によりはむしろ表象に制約されるのではなからうか。アリストテレス自身も欲求がある爲には表象がなければならぬと言つてゐるのである。^(一五五)併しそれでは感覺があれば欲求があると言ふのは誤であらうか。少くも單なる感覺のみでは未だ欲求はありえないと言ふべきであらうか。

否更に嚴密に考へれば快苦の感情が既に何等か感覺と行動との隔りを豫想する、或は一層精確に言へば感覺そのものゝ發生が刺戟と行動との間の距離を豫想するのであつて、下等な生物は殆んど意識的な感覺を持たぬと言ふべきであらう。感覺は刺戟と反應との間の距離によつて成立し、感情は感覺の獨立に必然的に隨伴し、且その獨立性の度合に比例して自己の獨立性を獲得する。それ故既に感覺と言ふ對象の形相の把握能力のあるところ、そこには何らかの程度に於て快苦の感情があり、快苦の感情のあるところ必ずや欲求があるに相違ない。併し乍ら表象は明かに感覺よりも一層對象から獨立的な認識能力であつて、いはば感覺が刺戟と反應の間の距離によつて成立するに對して、表象は感覺と行動との距離の上に成立すると言つて差支ない。そこで行動様式が複雑にな

ればなる程表象の重要性が増大する。前述の如く既に感覺の獨立のあるところ、そこには一種の欲求があることは否定出来ないが、感覺といふものはもともと現在直接接觸してゐる既成の對象から受ける、動的な刺戟の印象、乃至その印象の組織にすぎないのであるから、將來に向つて欲求される行動内容やその成果の形相を含まない。後者こそはまさしく表象の内容に他ならないのである。

そこで結局感覺と表象の何れが欲求原因であるかと言ふ選言的な問は成立しないことになる。既に感覺の獨立のある以上欲求が可能である。しかも欲求がある以上、そこには既にその契機として表象がなければならぬ。即ち動物の行動と云ふものが外界の刺戟に對する反應であるとして、刺戟の受動に即する面に於て感覺が成立すれば、行動に即する面に於て表象が成立する。そして感覺が表象に移行する間を張りわたす媒介者が快苦の感情であらう。そして表象は快苦の感情と融合することによつて直ちに欲求として働くであらう。^(一五六)この様に考へればアリストテレスが感覺が欲求を生むと言ふのも表象が欲求の要件であると言ふのも決して別の事ではない。感覺と表象は連続的であつて、何處からを感覺、どこからを表象と言ふべきかは判然と分ち難い。先に述べた如くア

リストテレーヌが表象を動物全般に認めてをり、高等動物に限つたりする所以であつて、下等動物が表象や欲求を持つのは不定な仕方にてであると言ふのは、之を觸覺に内在する極微の可能態として持つと言ふ意味であらう。逆に言へば感覺が直に欲求を生むと言ふのは表象の極小限であり、その極大限は後に述べる如く實踐理性に制約された欲求である。

嚴密に言へば凡ゆる欲求は表象と豫想する。感覺から直に生起する様にみえる時でも、實は極微の表象が認められる。表象はこの様に種々の程度の別を容れる。それは人間に特有な勘考的な表象と、動物にも共通する感覺的表象とに分けられる。^(一五七)感覺と表象は凡ゆる動物に認められ、且欲求は常に之を伴ふのであるから、欲求も亦凡ての動物に一般である。唯對應する感覺の種類により、或は又感覺との關係の親疎に應じて、欲求にも低級なものと同級なものとが區別される。而も感覺そのものが、前述の如く對象と行動主體との關係の親疎に比例する。即ち下等感覺は直接的であり、高等感覺は間接的である。蓋し下等感覺は生活の最も緊要な道具であり、高等感覺は比較的必要ならざる、但し一層價值高き豊かなる生活の爲に奉仕する能力だからである。凡て感覺は現前の對

象の形相を認識せしめることによつて行動の最初の動機をなすものであるが、この感覺に基いて動物が欲求するに際しては、必ずや何等か將來に於て實現さるべき状態を豫測せねばならない。この豫測された意識内容は最早感覺ではなくして表象である。^(一五八)與へられた刺激と反應とが近接して居る場合、即ち行動様式が單純であつて直接對象の享受に向ふ如き場合にあつては、現在の對象知覺と未來の行動の豫測表象とは近接して甚しい場合には辨別し難い程融合して居る。之に反して意圖される行動が現在與へられた對象に對して複雑な操作を通してのみ實現される様な場合、即ち複雑な生活要求を充すべき欲求に於ては、感覺と欲求との間に表象が明白に獨立した意識として現象するに至る。表象は抽象的形相の把持である限り、既に初發的思考現象とみなされる。「思考的な心には、表象内容が恰も感覺内容の如く所屬する。そしてそれが善いとか悪いとか主張又は否定する時には、之を追及したり回避したりする」。^(一五九)先に述べた如く「理性が表象を伴ふことなしには思惟しない」と言ふのも、いはゞ理性の本來の使命が行動の爲の指針たることを示す痕跡の如きものに他ならない。斯くの如き理性は表象と融合して欲求を限定する原理となるのである。之の感覺

的欲求即ち欲望に對する區別は「欲望は目前の快を追求するのに、理性は將來を目ざす」^(一六一)ことにある。そして所謂理論理性又は理論知とは對象と主體との利害關係甚だ隔絶して、もはや表象が欲求を喚起する程強烈な感情を伴はなくなつた状態に他ならない。知識の階層を定めて、感覺、經驗、技術、思慮と順次累層せしめ之等の上に理論知を置くと共に、理論知を無關心的認識と規定し、その成立を生活の必須的勞働配慮を脱した閑暇に求める時、^(一六二)アリストテレスはこの實踐知と理論知の正しい系譜を認識してゐたと言つて差支なからう。

上述の表象の區別に就ては、感性的表象の最も感性的なもの、下等動物の不定の表象であつて、之は殆ど感覺と一致する。一方勤考的表象に就ては、アリストテレスは次の様に語つてゐる。^(一六三)「感覺的表象は前述の如く、他の動物にもあるが、思量的表象は勤考しうるものの中にのみある。何とならば、之を爲さうか彼をなさうかといふ事は、既に勤考の働きだからである。そしてよりよきものを求めるのだから一つの標準によつて量られねばならない。かくして多くの表象の中から一つのことをなすことが出来るのである」^(一六四)と。之によつてみれば、所謂思量的表象と言ふのは、多くの可能的表象の中から、

思量によつて選定せられた一つの特種の表象を意味する様である。アリストテレスは言葉續けて言ふ。^(一六五)「そして次の事はこの（動物）が臆見を持つとは思はれぬ理由である。即ち前者は之が推論によつて生じたもの（表象）を持たぬのに、後者は之を持つと言ふ事である。それ故この欲求は思量的なものをもたぬ。」

我々はこの言葉から甚だ多くのものを學ぶ。第一に「^{アリステレス}推論の形をとると言ふこと。第二には臆見が思量又は實踐的推論といふものを豫想すると言ふ事である。併し之等の事は後に至つて改めて取上げる事にして、茲で注目すべきは第三に、人間に特有な表象は思量的表象であり、思量的表象とは（實踐的）推論によつて歸結された表象であり、之は多くの可能的表象から選ばれた特殊の表象であると言ふことである。この表象の探擇は言ふ迄もなく實踐的推論の結論であり或はそれに制約される。欲求は表象を豫想するが、この表象が合理的なものと非合理的なものとあるとすれば、それに應じて欲求にも合理的なものと非合理的なものとの區別されるであらう。實際アリストテレスは欲求にこの兩種を區別して、^{ニヒスエニヤ}欲望と意氣或は怒とは非合理的欲求であり、^{ニヒスエニヤ}願望は合理的欲求であつて、善きものを求めると言ひ、又願

望と言ふ代りに勸考と言ふ概念を置き換へてさへゐるのである。しかるに思量によつて決定された欲求を現す概念としては、別に意思と言ふ概念がある。而も意思と願望とは直ちに同一視されてゐる譯ではない。意思は明かに欲求と理性より成ると言はれるが、願望は單に欲求の一種として扱はれる。またニコモコス倫理學では兩者が明白に區別されて、願望は目的に關するに意思は手段に關すること、前者は不可能なことにでも關るのに、後者は唯可能なことのみ關ると言はれる。之によつてみれば願望は思量勸考の末に理性に基いて決定された意欲ではなく、寧ろ思量によつて吟味せられ具體化さるべき素材的な欲求である様に思はれる。

願望の合理性に就ては問題がある。グルターの解釋によれば願望は欲求の一種である以上無理的でなければならぬ。アリストテレスが凡て願望は勸考的なものの中にあると言ふのは、願望が理性を持つたものに依存すると言ふ意味であつて、願望そのものが理性形式でもなければ、その内容が概念的なでもないと言ふ。之に對してタイヒミュラーは願望に對應する理性は理性部分であるから、願望も理性的であると反對してゐる。併しこ

の論争に對する解答はアリストテレス自身の命題に認められる。アリストテレスは靈魂を有理的と無理的とに分ち、又は知識的、意氣的、欲望的の三部分に分つ説を批判して言ふ。一之等の他に尙論理的にも能力的にも之等の何れとも異なる様に思はれるところの欲求部分と言ふものがある。之を除外するのは全く不條理である。

何故ならば、有理的な部分には願望が生じ、無理的な部分には欲望と憤激が生ずるし、若しも靈魂が三種であるならば、その一つ一つに欲求が生ずるからである。之は靈魂を機能に隨つて多數の部分に分ける立場からなされた批評の言葉であるが、併し我々の前に觀た如く、この多部分説は二部分説と媒介され、欲求的部分は無理的部分に屬せしめられたのであつた。それ故アリストテレスが明瞭に認識した如く、欲求的部分と云ふものを、單純に機能的な意味での無理的部分の中に含ませることは不可能となる。欲求的部分を完全に含むところの無理的部分とは機能的なものではなくして、形而上學的、倫理的的概念たるべきことは明かである。願望といふ作用は欲求的部分の作用であり、それ自體としては理性の作用ではない。併し欲求的部分は單にそれのみで働くものではなく、他の部分と關係して働くのであるから、願望は

欲求的部分が理性的部分をまつて働く形式であり、その限りに於て理性的であると言ふことが出来る。確かに基礎的な機能に於てはワルターの言ふ如く無理的であるにしても、之が理知に關與する關係は單なる附帶性にすぎないと言ふのは過言であらう。嚴密に言へば欲求的部分にとつて有理性は附帶的であるにしても、願望そのものの中には理性が含まれて居り、隨て願望にとつては理性

は必然的な屬性なのである。ワルターは理知が欲望を規定するのではなくして、欲望の對象を齎す動機をなすにすぎないと言ふ。^(七五)即ち理性活動の伴ふ表象が快苦の感情を媒介として欲望を生むと言ふのである。併し理知が表象を媒介として欲求を生む以上、この様にして現象する欲求は正に合理的な欲求でなければならぬ。尤もこの様に願望が理性的部分を媒介とする欲求部分の活動であるとしても、之と意思との區別は未だ明かではない。願望は何らかの意味で合理的欲求であるが、それでは意思が手段の思量を媒介とする欲求であるのと如何に區別されるであらうか。願望は一方では勘考であり、或は理性的表象乃至實踐的推論の結果としての欲求であると言はれ乍ら、他方に於て ^{ブレイン} 思想 ^{ボクセル} 又は勘考に媒介された欲求たる意思と區別して恰も直接的欲求であるかの如く語られ

る。この難問は如何に解すべきであらうか。之を闡明する爲に我々は一方に於て願望の契機としての合理性が何等かの意味で意思の合理性を制約するか否かを問ひ、他方に於て適に意思の契機としての合理性が願望の合理性と如何なる關係をもつかを究めねばなるまい。

意思は思量的欲求と言はれる通り、思量と欲求を二つの本質的契機とするが、それではこの欲求は如何なるものであらうか。欲求が願望、意氣、欲望の三種に分たれることは前に述べたところであるが、之等三種の欲求は凡て意思の契機となりうるものであらうか。差當り合理性といふものを無差別に實踐知一般と解するに止まるとすれば欲求が理性に隨ふ限りに於て、それは兎も角も實踐的な理性に關與するからその限りに於て凡ての欲求は意思の契機になる様にもみえる。殊に節制的な人の性格に於ては欲望が理性に隨ひ、理性の命令する如き仕方では欲求すると言ふのは之を裏書する如くである。併し他方勇敢については意氣にしたがつて危険をおかすことではなく、理性にしたがつ場合であると説くので、^(七六)茲からみると意氣にして尙意思の契機ではない譯にみえる。のみならず欲求の三種の中意氣と欲望は抑無理的な欲求であると定義されてゐるのである。^(七七)かくしてワルターは恐ら

く願望は他の欲求にまさつて意思に親密であらうと言ひ、しかも欲望や意氣をも端的に斥け得ずして、それが理性と協同的に働かば限りに於て意思の契機であるとしてゐる。^(一七九)

之は解決としては頗る曖昧であつて、結局意思の契機が願望に限らずその他の欲求をも含むのか、或は特に願望に限るのか不明である。何れにしてもその欲求は何等か合理的たることを要すると言ふのであるが、併しそれではこの願望の合理性、又は一般に欲求の合理性とは何であらうか。それは思量との調和であると言ふであらう。^(一八〇)

併し思量がそもそも目的を前提して之の實現の爲の手段にのみ關するものとされる限り、この思量と並んで意思の契機となる欲求の合理性を形成するものが又再び同じ手段の思量であると言ふのは明かに循環を免れない。この様な困難をみると我々は寧ろ意思の契機としての欲求そのものには別に合理性を認めず、凡ゆる欲求が唯手段に關する思量を伴ふ限りに於て意思を形成すると言ふタイヒミューラーの説に整合性を認めざるをえない。^(一八一)そして實際惡徳者は欲望に隨ひ乍ら前もそれを意思して爲すのであり、例へば放埒な者は肉體的な欲望に従ふことを格率として意思的思量的に行爲するものと説かれる。併しそれでは逆に意思の契機としての合理性は如何なる意味で

も願望の合理性を制約しないであらうか。言ひかへれば思量は如何なる欲求とも結合する手段知であつて特に願望と密接な關係をもつことはないのであらうか。この間に對しては我々が先にみた如く願望を以て思量又は勘考的な表象に基く欲求であると言ふ規定が否定的な答を與へる。しかもその思量が單なる手段の探究に止まるならば、結局願望と意思を混同する結果に立至ることは之亦我々の先に遭遇せる困難に他ならない。かくしてこの難問を解く唯一の道は惟ふに思量又は勘考の意味を區別することによる他はあるまい。願望の契機としての思量や勘考、或は實踐的推論と、意思の契機としてのそれは恐らく内容を異にするのであらう。恐らく願望の契機としての思量は目的自體の價值的考量であり、意思の契機としての思量は或る決定的な目的、即ち欲求の對象を實現する爲の手段の探求を意味するのではなからうか、事實願望の契機としての表象や理性を語る際には、常にそれが目的のよしあしを教へるものとされるのに對して、^(一八二)意思の契機としての思量は殆ど實現手段の思考として説かれてゐるやうである。^(一八三)

斯くして我々は思量とか勘考といふ概念に二種の意味を區別した。一つは願望の契機として、行動の目的の價

值的了別の原理をなすはたつきであり、今一つは願望又は一般に欲求を前提して、この欲求の實現の爲の手段を求めざる思惟過程である。願望は第一の意味での思量を豫想するが、第二の意味での思量は却て願望を豫想し、之の結果が思量されたる欲求と言はれるところの意思に他ならない。この様に於て願望の合理性と意思の合理性とが區別され兩立せしめられる。願望の契機たる思量が價值判斷であるところから、單なる願望は未だ必ずしも實現可能な欲求とは限らない。それは不可能なことに關りうる。例へば個人的な生命の不死と言ふ様なことは不可能事であるから、それは實現の爲の手段を考へる時には廢棄せられて、意思となる資格を失ふのであるが、而も不死は尙價值的たることを失はないのである、且また願望は思量を前提とし乍ら、尙依然として目的に關つて手段に關るのではないと言ひうるのである。(未完)

- 一一四 「可能概念の諸相」二、哲學研究第二九八號二九頁
 一一五 De An. I. 7. 431 a 178. 432 a 8. 13. De Memor. I. 449 b 31. De Sensu 6. 445 b 16. 「靈魂の構造」哲學研究第三二〇號九七四頁參照。
 一一六 De Memor. I. 449 b 14.
 一一七 De Memor. I. 449 b 24 f. 「その記憶は知覺でも

マリストテレスに於ける實踐の構造(承前)

なければ勤考でもなく、寧ろ時間が経過した時、それによつて生ずる之等のものの一種の特性又は情態である。」

- 一一八 An. Post. B. 10. 1003 a 11. 「かくて知覺から生ずる。何故ならば、記憶は數多くあるのに、經驗は一つであるから、そして經驗からして或は凡て靈魂の中に固定化された普遍的なものから、即ち多の外なる一、それら一切の中に於ける自己同一の一面から技術や知識の原理が生ずる。即ち生成に於てならば技術の存在に就てならば知識の原理が生れる。實際之等の習性は限定されたものとして生れついたものでもなく、一層知られやすい他の習性から生ずるものでもなく、知覺から生ずるのである。例へば戰場に於て一人踏止まる者が出來ると他の一人が踏止まり、また他の一人かといふ様にしてもとの隊型が立直される如きものである。靈魂はこの様な變化をうけることの出來る様にならざるべからず。」 cf. Met. A. 980 a 28 ff. (註 97 參照)

- 一一九 De An. I. 3. 429 a 1. De Somno. I. 456 a 17. Rhel. Air. 1370 a 28.

- 一二〇 De An. I. 3. 427 b 27 ff. 「思惟を働きて就て、それは感覺することとは異つてゐる、その中の或る部分は表象であり、他の部分は判斷であると思はれるから」
 Ibid. 428 a 21 f. 「(表象は)之等の中の或る能力又は一つの習性であらう、それによつて我々が判別し、又眞理を認識

したり誤を犯したりするところのものである。ところが知覚シヤイナク、聽見ヒコク、知識チカヒ、理性レイセイもこの様な性質のものである。

De An. At. 401a8. 9. 13. 427b28. 10. 433a10. cf. Motu An. 6. 700b17. 7. 701a30. 36. 701b18. 8. 701b35. 11. 703b18.

IIII Motu. An. 8. 722a19.

IIIII De An. 110. 433b29. 11. 431a6. cf. Motu. An. 6. 702a5. 117. 701a30ff. 118. 8. 70. 135. 722a19. 11. 703b10. 18.

IIIII Top. Z. 6. 144a24. 「蓋し種差は丁度類もやうである如く附帶的に處するこゝはなからである。即ち或る種差が或るものに屬したり感さなかつたりすると云ふことはなす。」 144b16. 「蓋し各の種差はその同有の類に伴々オノオノである。」 Part. An. 43. 643a27. 「或は言體カクシキ（本質）に於けるものとよつて分類すべく、自體的偶有性オノオノノコトニヨリテによつてはならぬ。例へば人あつて圓形を分類して内角の和が二直角なるものと二直角より大なるものとに分じ如きである。」

IIIII De Memor. 1. 450a1.

IIIII De Somnis. 2. 460a9. ff. 「そして我々の語つたことは眞實であつて、表裏の運動が我々の感覺器官の中に生ずることは、蓋しひとが眠りに入りつゝある時や醒めつゝある時我々が覺るところを注意して記憶しようと試みる

ならば明かである。蓋し時として人は眠つてゐる時に現れる映像を目醒める時に感覺器官の中にある運動として見出すからである。」 459a16. 「即ち表象の能力は感覺の能力と同じものであるが、その本質は表象能力に於けると感覺能力に於けるとでは相違する。」 cf. 458b10.

IIII De Memor. 1. 450a22. 「*mp* *no*」で記憶が靈魂の如何なる部分に屬するものであるかと言ふこと、即ちそれが正に表象する部分に屬してゐることが明かである。そして表象されるものはそれ自體を悉く記憶されるものであるが、云々」 Ibid. 12. De Somnis. 1. 459a21. 「明かに夢みる事は感覺能力の仕事である。しかもそれが表象能力である限りは於じ」

IIII De Memor. 1. 450a10. 「そして表象は普通感覺の一情態である。」

IIII De An. 11. 425a13b3.

IIII De Somn. 2. 456a6. De Juvent. 1. 461b28.

さて特殊な感官はその感覺が現實に作用する時には必然にそこで出發はねばならぬところの何か一つの普通の感官を持つてゐて、そしてそれは自體の前と呼ばれる部分と後と呼ばれる部分との中間にあるであらう。 3. 459a22. 3. 460a12. 「併し乍ら雖かに少くも凡ての有血動物に於ては感覺（能力）の支配的な部分は心臓の内にある。何とならば必然にこの中に凡ての感官に普通の感覺があらねばならぬからである。」 Part. An. 10. 656a28. 125. 13. 665a12. 4. 666a1. 「更に快きものと苦しきものと動きや一般

に凡ゆる感覚の動きはその中（心臓）にはじまると共にそこに向つて終止する様にみえる。蓋し始源は若しありうのならば一つでなければならぬ。そして中心は最もそれに適してゐるからである。何故なら中心は一つであつて凡ゆる點から同じ様にまたは殆んど同じ様に到達されるからである。また血液も無血の部分と共に感覚を持たぬから、そこで明かに最初に血を持ち、それを容器の様にして保有する部分が感覚の始源を持たねばならぬ。そしてこの部分が心臓であることは理屈からしてもさうみえるのみならず、感覚は心臓からである。』Ibid. 33. cf. Part. An. Br. 647a23-31. Pro. 67b16. 55. 68b2. Gen. An. B. 6. 74b36. E. 2. 781a21.

1311 De Memor. 1. 450a10. De Somnis. 3. 461a4. b1.

1312 De Somno. 1. 55a15. (しかし凡ての感覚に伴ふ或る共通な能力としては次の様なもの、即ち之によつて視たり聴いたりすることを知覺するところのものがある。何とならば確かにひとは視覺によつて視てあることを視るのではなく、また甘いものと白いものが別のものであることを判別したり判別出来たりするのは味覺によつてもなく視覺によつてもなく、又その兩者によつてもなくして凡ゆる感覚器官に共通な部分によつてである。』cf. De An. 12. 426b14. 425b12-15. E. N. 17. 1170a1. E. E. E. 12. 124b36.

アリストテレスに於ける實踐の構造（承前）

1313 De Somno. 2. 455a15 ff. De An. 12. 426b8 ff.

1314 De An. 11. 425b1.

1315 De An. 11. 425a14. b4. De Somnis. 1. 458b5. De Sensu. 4. 442b4. E. N. 2. 9. 112a27.

1316 De Memor. 1. 450a9-23.

1317 De Memor. 1. 449b14.

1318 De An. 11. 425a30. (そして諸感覚は五に他の感覺によつて固有であるものを附帶的に知覺する。それは個々別々の感覺としてではなくして一つのものとしてであつて、それは感覚が同時に同一の感覺されるものに關する場合、例へば膽汁に就てそれが黄色であることと苦いことを知覺する場合に起ることである。何故ならその時その兩方のものが一つのものであると言ふことは（共通感覺以外の）他の感覺ではなからである。』

1319 共通感覺といふ概念はアリストテレスに始まる。

プラトーンに於ては感覺は初期に於ては肉體の機能とされ綜合統一の如き働きは理知の機能であつた。(Theaet. 65) また後期に於ては靈魂が肉體を通してなす機能とされ印象の統一は靈魂に歸せられはしたが (Theaet. 185 D. 184 D.) 未だ共通感覺と言ふ概念はなかつた。(長澤信壽、プラトーンに於ける知識の道、哲學研究二二一號七〇五頁參照)

140 Kant, Kritik der reinen Vernunft. 152. 天野譯

二五〇頁

茲でカントは構想力をば「對象をそれが理に存在しなく

とも直観に於て現はす能力である。」と定義し更に之を説明して「さて我々のあらゆる直観は感性的であるから、構想方はそれのもとに於てのみ悟性概念に之と對應する直観を與へうとこゝるの主観的制約に關しては感性に屬するものである。然し構想力の綜合は——限定的であつて決して感性の如く單に被限定的ではないところの——自發性の實行である。従つて感性をその形式に關して、統覺の綜合に則つて先天的に限定することができるといふ限りに於て構想力は感性を先天的に限定する能力である。そして直観を範疇に則つて綜合する構想力の綜合は構想力の先驗的綜合でなければならぬ。これは感性に對する悟性の一つの所爲である。そして我々に可能的なる直観の對象に對する悟性の最初の（同時にあらゆる他の適用の基礎であるところの）適用である。それは形像前として——悟性のみによつてなされ構想力の助けを全くからぬところの——知性的綜合とは區別せられる。」之に續いて問題の區別が立てられるのである。即ち「それで構想力が自發的である限りでは私はそれをしばし——産出的構想力と名づけて再生的構想力と區別する。後者の信念は全く經驗的法則に即ち聯想律に従ふそれ故に再生的構想力は先天的認識の可能性を説明するためには何の役にも立たない。従つてそれは心理學に屬するもので先驗的哲學には屬しない。」といふのである。

これによつてみるとカントは第一段では構想力を感性に屬せしめ乍ら、第二段ではそれが感性を「先天的」に限定しうると言ふ理由によつて之を「悟性の一つの所爲」であ

り、「悟性の最初の適用」であると言ふ。「いつたい感性的直観の多様を綜合するものは構想力であるが、之は其の知性的綜合統一に關して悟性に依存し、覺知の多様に關しては感性に依存する」と云ふのも同様である。之は文字通りに理解すれば構想力は感性に屬すると共に悟性に屬することになつて矛盾であるが、それは構想力の中間性の然らしめるところである。即ち先天的なるものは悟性的、直観的なるものは感性的と言ふ規定が狭きに過ぎる爲の矛盾である。構想力には先天的限定の契機と直観的契機が矛盾なく含まれて居るのである。カントは再生的構想力は心理學に屬するものとして捨て、省みないが、人間靈魂の認識能力が感覺から表象へ、更に表象から思惟へと連續的に發展すると言ふ經驗的事實の觀察は決して感性和悟性の媒介機能の説明に無益なものではないのである。

一四一 西谷教授は知覺の再現としての構想力を再理的、夢のそれを生産的構想力に當てられてゐる「アリストテレスの構想論」哲學研究第二二六號 八二頁參照）

一四二 カント純粹理性批判第一版一二〇頁。

「我々に與へられる最初のものは現象である。それが意識的と成つた場合に之を知覺といふ。（中略）然しいづれの現象も多様を含む。従つて種々なる知覺は心性に於て其自身個々分散して意識せられる。それ故に知覺の結合が必要である。しかも知覺は感能自身によつて結合を與へられることはできぬ。すなはち我々には此の多様を綜合する活

動能力がある。それを我々は構想力と名づけ、それが直接に知覚に及ぼすはたらきを私は「*Verstand*」知と名づける。構想力は即ち直観の様を綜合して一つの形像となさねばならぬ。故に構想力は先づ印象を其の活動に受け入れねばならぬ。換言すれば印象を覺知せねばならぬ。また少し後では (126)「してみれば構想力は先天的綜合の能力でもある。これ我々がそれに産出の構想力の名を附する所以である。そして構想力が現象のあらゆる多様性に関して意圖するところは現象の綜合に於ける必然的統一に他ならぬといふ限りに於て我々は之を構想力の先天的機能と名づけることができる」と繰返してゐる。

カントは構想力のこの綜合作用を自己の創見として誇つてゐる。即ち (130. N. B.)「構想力が知覚そのものの必然的成分である事には、まだ如何なる心理學者も考へ及ばなかつたと思ふ。それは一面には人が此の能力を單に再現に限つたのと他面には感能が印象を興へるのみならず、之を結合して對象の形像を成立せしめると信じたからである。が、それには疑もなく印象の感受性の他になほそれ以上のもの、といふのは印象綜合の機能が必要なのである。」と云ふのである。ところが我々が右に述べた如く「構想力が知覚そのものの必然的成分であること一は如何なる心理學者も考へ及ばなかつた」ところが心理學者の開祖であるアリストテレスが明瞭すぎる程明瞭に述べてゐるところなのである。一方に於て記憶や夢想や一般に表象を生ぜし

アリストテレスに於ける實踐の構造(承前)

めるところの共通感覺は同時に特殊感覺に統一を興へ要素的感覺から統一的知识を形成するところの能力とされたのである。アリストテレスは決してそれを單なる再現能力に限つてゐない。確かに彼は或の意味で「感能が印象を興へるのみならず、之を結合して對象の形像を成立せしめると云ふことを信じ」¹⁾はゐる、併し決して要素的な特殊感覺にこの能力を歸した譯ではなく、他く迄之と區別された共通感覺といふ綜合的知覺能力を認め、之にその機能を歸したのである。

- 一四三 De An. I. 3. 428a8 「更に知覺は常に現在してゐるが、表象はキマではない。そして若し現實的に(知覺と表象とが)同じであるなら、凡ゆる畜生に表象がある筈であらうが、さうは考へられない。丁度蟻とか蜂とか (cf. Hils Comm. ad. loc.) 地虫の如きである。」 J. 3. 415a10. (死すべき者の)或るものは唯表象力だけによつて生き、他のものにはその表象力さへないものがある」 cf. F. 3. 328a11. 「畜生の何れにも信念はないが表象は多くのものである。そして畜生の或るものには表象がある。」
- 一四四 De An. B. 2. 413b16.
- 一四五 De An. I. 41. 433b31.
- 一四六 De Somno. 2. 455a22 ff. 「(この共通な感覺能力)は特に觸覺と同時にある。何故なら之は他の感覺と離れてもありうるが、他のものは之を離れてはありえぬからである。」

一四七 De Memor. 1. 449b28. それ故凡て記憶は時間を

伴ふ。かくして時間を知覺するところの者、動物の中で斯の如き者のみが記憶する。そしてそれによつて時間を知覺するところの器官によつてするのである。」De Memor. 1. 15. 26. 「そこで想起するといふ事と記憶するといふ事は單に時間の上で異なるのみでなく、次の事で、即ち動物の中でも記憶する能力を（我々と）共有するものは多いけれども、いはば我々に知られてゐる動物の中で人間を除いては何ものも想起する能力を共有するものはないと云ふ事に於て異つてゐる。」Hist. An. A. 1. 488 b 25. 「動物の中で人間のみが思想的である。記憶や教へる性質は多くの動物が共有してゐる。併し人間を除いて他の如何なる動物も想起することは出来ない。」Zeller はアリストテレーヌが記憶の時には理性を持つたものに限る、時には右の如く他の動物にも認めて論語の一致を缺いてゐる様に云つてゐる。(Th. d. Gr. II. 2. 101. N. B. 4) 彼が前者の例として引いてゐるものは De An. 1. 1. 10. 13 b 5 ff. 「ところで互ひに反對な欲求が起り、之は理と欲望とが反對である時にはいつも起ることであり、それはまた時間の知覺を持つてゐるものに起るのだから」云々といふ言葉である。併し之は少し注意すれば判る様に欲求の對立或は理と欲望の對立が時間知覺ある動物に起ると云ふにすぎず、必ずしも時間知覺のある動物には常に欲望と理の對立が起ると云ふ逆命題の成立を保証するものではない。時間知覺を持つてゐても理性を持たず、唯表象にのみ隨ひ加き動物があつても何等不都合を生じないのである。茲に「時間の知覺」と云

ふ語を用ひてゐることも亦注意されるべきであらう。

- 一四八 De An. B. 1. 14 b 1. 「凡て感覺のあるものには快と苦とがあり、隨つて又快いものや苦しい物がある。それらのあるものには又欲望もある。欲望とは正に快い物を求める欲求だからである。」1. 7. 13 a 13. 「また欲求する能力と回避する能力とは別のものではない。それは相互にも別のものでなく又感覺する能力とも別ではない。唯その何であるかが異なるのみである。」De An. A. 3. 414 b 14. 「觸覺を持つ動物には亦欲求が屬する」然るに前述の如く觸覺は凡ゆる動物一般の屬性である。
- 一四九 De An. B. 1. 6 a 19. 「靈魂の同一の能力が營養力と生殖力とである。」

- 一五〇 De An. B. 1. 6 b 3. 「感覺とは、前述の如く、動かされることや又働を受けることとに於て成り立つものである。」と云ふのは感覺とは質の變化の一種であると普通に思はれてゐるからである。] Ibid. A. 4. 48 b 16-18. B. 4. 45 b 4. De Somnus 2. 159 b 5. Phys. Et. 244 b 11, 25. Metaph. 1. 5. 1009 b 13. 等 De An. B. 1. 1. 424 a 18. 「感覺とは感覺される物の形相を、その質料を伴ふこととして受け容れうるものである。」1. 8. 411 b 23. 432 a 1.
- 一五一 Motu. An. 6. 701 a 1. 「然るに欲求を欲求的部分は動かされて動かさるべきである。」10. 701 a 5. De An. 1. 1.

一五二 Motu. An. 8. 701 a 35.

一五三 De An. 1. 7. 431 a 8. 「動物は知覺することは

單に定言することや思惟することと似てゐる。併し快いか苦しい時には、丁度肯定したり又否定したりする様に、求めたり避けたりする。そして快を感じたり苦を感じることは善又は惡に對して感覺力の中庸によつて働くことである。」

一五四 De An. I. 7. 41b6ff. 「然るに時として靈魂の中にあるところの表象や思惟されたものによつて見る眼でみてゐるかの様に未來のことを現在することに關らしめることによつて勘考したり思量したりする。そして丁度の場合に快いか苦しいとか云ふ様にこの場合には避けたり求めたりする。即ち一般に行爲に於てさうするのである。」

一五五 De An. I. 7. 431s14. 「理論的靈魂によつては表象（像）が感覺（像）の如くある。そして善いか悪いか云ふと避けたり求めたりする。それ故に靈魂は表象なしには思惟しないのである。」 I. 10. 433b38. 「欲求的（能力）は表象なしにはありえない。」

一五六 Mou An. 8. 702a17. 「即ち器官の部分は感情によつて合目的に整へられ、また欲求は感情を、そして欲求を表象が整へる。そして表象は思惟により又は感覺によつて生ずる。」之では制約關係は感覺又は思惟→表象↓欲求↓感情→器官と云ふことになる。感情は欲求と器官の運動との媒介とされ表象と欲求の間に置かれてゐない點我々の本文に於てなした解釋と異なる様であるが、感情はこの制約關係の一項に止まらず、むしろその全般に互るのである。

アリストテレスに於ける實踐の構造（承前）

らう。

一五七 De An. I. 10. 433b29. 「然るに表象は凡て勘考的なるか感覺的なるかである。そして後者は他の動物も亦參與するのである。」 B. 11. 434a5. 「然るに感覺的表象は、前述の如く、他の動物の中にもあるが、思想的なものは勘考的な（動物）の中にある。」

一五八 De Memor. I. 449b21. 「寧ろ現在のものに關するものは知覚であり、未來のものに關するものは期待であり過去のものに關するものが直感である。」期待と就ての詳説はないが、表象とは対象が眼前しないでそれを感覺の如く意識に現象せしめることであるから、期待も記憶も共に表象の様態と云がひなす。cf. De An. I. 3. 428a7. 16. 2. 425b25.

一五九 De An. I. 10. 433b7.

一六〇 De An. I. 7. 341a17. 8. 432 a 8. De Memor. I. 449b31.

一六一 De An. I. 7. 431a14.

一六二 Met A. I. 2. cf. E. N. X. 7.

一六三 De An. I. 10. 433a11. 之於ては勘考と表象とを對立させてゐる。その際の表象は感性的表象の意味であらう。併し表象の中に勘考的表象があるからとて、勘考と表象とが無差別でないことは云ふ迄もない。勘考的表象とは勘考する表象ではなくして、勘考に媒介された表象のことである。

- 一七六 E. N. I. 15. *ηἰγβυτῆ* (註一七八參照)
- 一七七 E. N. I. II. *ηἰγβυτῆ*, *ηἰγβυτῆ*, cf. *ηἰγβυτῆ*, 17E.
- 一七八 Rhet. A. 10. 1369a4.
- 一七九 Walker, op. cit. 214.
- 一八〇 Walker, op. cit. 254, 496. E. N. Z. 2. *ηἰγβυτῆ*.
- 一八一 Teichmüller, op. cit. 94.
- 一八二 De An. I. 7. 431a14 b6. (註六五、六四參照)
- E. N. I. 7. *ηἰγβυτῆ*. 於て表象といふものが目的の善惡を我々に知らしめるものであるのに、之は我々自身がその原因であり、如何なる表象をもつかは我々の責任に歸すると云ふのも、この欲求に先立つ表象が目的の善惡の價值判斷であることを示す。I. 6. *ηἰγβυτῆ*. 「願望されるものとは端的にして眞實には善きものであるが、各人にとっては善くみえるものであると云ふべきであらうか。」この「善くみえる」とは表象が對象について善惡の直観的認識を興へることを意味する。Ibid. 29. 「蓋しよき人はそれぞれの事柄を正しく判斷するのであつて彼にあつてはそれぞれの事柄の眞相が現れるからである。つまり天々の習性によつて固有な良きことや快きことがあるが恐らくよき人はそれぞれの場合に眞相を見ることによつて異つてゐるであらう。丁度それらの規準であり尺度であるから。」I. 11. 1155b23. 「併し各人は自己にとつて善きものを愛するが、端的には善きものが愛さるべきものであり、各人には各人

にとつて善きものが愛さるべきものであると考へられる。そして各人は自己にとつて善きものではなく、よくみえるものを愛する。「だがかゝる區別は實は存しない。愛さるべきものとは愛さるべきものと見えるものに他ならぬから」但しこの最後の一句は或は竝入ではなからうか。

一八三 E. N. I. 5. *ηἰγβυτῆ*. 「然るに我々が思量するのは目的に就てではなく、手段に就てもある。即ち醫者は治療しようかどうしようかと思量するのではなく、辯論家は説得しようかどうかを思量せず、政治家は良政を齎さうかどうかを思量せず、その他何人も目的に就ては思量しない。却て目的を前提しておいて、如何にしてとか何によつて達成されるかと云ふことを研究するのである。そして多くの方法によつて生ずる様にみえる時には、どれによれば最も容易に最も立派に達成されるかを考察するし、一つの方法で達成される時にはどの様にして之によつて成り、又それが何によつて成るかと云ふ様にして第一の原因に追廻及する。そしてこの始源は探究の順序に於ては最後のものである。Rhet. A. 6. 1302a16. 「彼等の思量するのは目的ではなくて手段である。それは行爲に關する功益である。そして功益はよきものである。」